R18

冒険者、迷宮で置き去りにされハイエナの拾い屋に鎧を剥がされ、地上で次の潜りを自分から頼む

2026
•
10
•
28

目次

第1話
第2話

第1話

罠が鳴ったのは、凱（がい）が列の先頭で盾を構え直したときだった。

足の下で石が沈んだ。跳ね上がった鉄の顎が、左の足首を長靴の上から噛んだ。脛当ての縁が歯を受けたおかげで骨は無事だったが、顎は閉じきったまま動かない。踏ん張ろうとした膝が抜け、凱は盾の下端を床について、どうにか倒れずに体を支えた。巻き角の先が低い天井を擦り、垂れた耳の内側を汗が伝った。

「頭（かしら）、金具だ。開けてくれ」

後ろで松明が揺れた。頭は屈みかけて、途中で腰を止めた。通路の奥で、重い物が石を引きずる音がしていた。

「来るぞ」斥候の若いのは、もう半身を返していた。「罠の音で呼んじまったんだ。奥のやつが来る」

「開けるだけだ。お前の指なら、すぐだろうが」

「凱、持ちこたえろ」頭は腰を伸ばした。「上で人を出す。ギルドにかけ合って、すぐ戻らせる。それまで盾を立てとけ」

返事を聞く前に、松明は遠ざかっていった。足音が角を曲がり、火の色が壁から薄れていく。

「おい、灯ぐらい置いてけ！　いつも誰の後ろに隠れて歩いてたと思ってんだ。棍棒も矢も、全部この盾で受けてやったろうが。罠を踏んだのがお前らのほうだったら、俺は顎ごと床から引っこ抜いてでも担いで出たぞ。それを、灯ひとつ残さねえで――」

返ってきたのは、通路の壁に跳ね返った自分の声だけだった。

盾にすがったまま、凱は床に尻を落とした。石を引きずる音は、しばらくして別の通路へ逸れていった。静かになると、暗さのほうが重くなった。迷宮の深層に、灯の無い冒険者がひとり、罠に足を噛まれて座っている。置き去り、という言葉が喉まで上がってきて、凱はそれを奥歯で噛み潰した。

盾を持ち上げ、何も見えない闇のほうへ面を向ける。厚い胸と太い腿を詰めこんだ板鎧が、身じろぎのたびに低く鳴った。

「前衛の誇りは鎧の厚さだ」

誰に聞かせる声でもなかった。言ってしまうと、かえって寒くなった。

どれだけ経ったのか、凱には分からない。足首は長靴の中で膨らみ、脛当ての縁に食いこんでいた。手探りで顎の継ぎ目をなぞっても、留め金のありかさえ見つからない。

そこへ、光が来た。

足音はひとつきりで、歩幅がやけに長かった。手提げの灯が角から現れ、床を舐めるように近づいてくる。凱は盾を構えた。腕が重かった。

灯を提げた男は、凱が立ち上がっても見上げるほど背が高かった。顔は人の男のものだが、頭の上に丸い耳が立ち、唇の端から牙がのぞいている。腰の後ろで、斑の尾がゆっくり揺れた。ハイエナの獣人だった。背の荷から、誰かの籠手と、割れた盾の縁がはみ出している。

「……死体漁りか」

男は足を止めた。灯を上げて凱の顔を照らし、それから噛まれた足首を照らした。

「死体は、口をきかねえ」

「なら用はねえだろ。行けよ」

「用はある」男は荷を下ろし、凱の前にしゃがんだ。膝を折っても、目の高さが凱より上にある。「迷宮で転がってるもんを拾うのが、俺の仕事でな。拾ったもんは俺のもんだ」

「転がってねえ。座ってんだ」

男の喉の奥で、短い音がした。笑ったのかどうか、凱には見分けがつかなかった。

男は灯を床に置き、壁を指でなぞった。新しい擦り傷が腰の高さに走り、角のほうへ伸びている。

「走りながら、鞘で擦った跡だ。戻る気のある奴は、こういう擦り方はしねえ」

「上で人を出すって言ったんだよ」

「人は出すさ。上の酒場で、酒の相手にな」

凱は盾の縁を握り直した。

「お前、名は」

「礫（つぶて）。拾い屋だ」

「凱だ。ギルドの重戦士だ。罠を開けろ。上に出たら、礼はギルドから出させる」

「ギルドの礼は、拾い屋の顔を見たとたんに細くなる」礫は顎の継ぎ目に指を差しこみ、ばねの具合を確かめた。「開けられる。けど開けても、その足じゃ歩けねえ。背負って出る」

「担がれてたまるか」

「なら這って出口まで行くか。この辺りは、這ってるもんから先に食われるぞ」

礫の指が、凱の喉元のマントの留め金に伸びた。

「何してやがる」

「鎧を着たままの図体は、背負えねえ。剥がす」

凱は籠手の拳を振った。礫の頬骨に当たって、唇が切れた。礫は首を少し傾けただけで、垂れた血を舌で舐め取り、留め金を外した。マントが肩から滑り落ち、首筋に深層の冷えがじかに触れた。二発目を振りかぶる前に、礫の手はもう胸当ての脇の革紐にかかっていた。

「それは剥がすな。胸当てだけは――」

「重いんだよ、これが。背負ったら背骨に当たる」

左足が罠に噛まれているせいで、体をひねって逃げることもできない。革紐がほどけ、胸当てが前へ浮いた。礫はそれを両手で受け

取り、灯にかざして、打ち出しの面を指の腹で撫でた。

「……いい板だ」

「売る気だろ」

「売りゃ、ひと冬食える板だ」

礫はそれだけ言って、胸当てを荷の上に寝かせた。

肌着一枚になった胸に、冷えが張りついた。綿の布は汗で肌に貼りつき、厚い胸の形と、尖った乳首の形をそのまま浮かせている。冷えるほど、乳首は布を押し上げた。

礫の目が、胸へ降りた。灯を持ち上げ、布越しに浮いた乳首に、近くから光を寄せる。

「……照らすんじゃねえ」

「板の下は、ずいぶん薄着だな」

礫の指の背が、布の上から乳首をかすめた。触ったというほどでもない。それだけで、背中に冷えとは別のものが走った。凱は胸を隠すより先に、右手を下へやった。腰当ての前の垂れ板を、掌で押さえる。

礫の目が、その手に止まった。

「股か」

「何がだ」

「下穿きに縫いこんでんだろ。稼ぎを」礫は顎で凱の手を指した。
「冒険者はたいていそうする。荷を落としても、股の金までは落とさねえからな。出せよ。どうせ背負うなら、軽いほうがいい」
「何も入ってねえ」
「なら、なんでそんなに押さえてる」
礫の片手が凱の手首を掴み、横へ引き剥がした。もう片方の指が、垂れ板の縁を持ち上げる。板が跳ね上がって腰帯に引っかかり、下穿きの白い布が灯の下に出た。凱は膝を閉じようとした。噛まれた左足が引っぱられ、足首から脛へ痛みが走って息が詰まる。閉じきらない膝のあいだで、指が布の端に引っかかった。

「やめろ、拾い屋――」

布が横へずらされた。

金の袋は無かった。ちんぽも、金玉も無かった。厚い腹の下、毛の薄い丘のさらに下で、肉がひとすじの割れ目になって閉じている。割れ目の上の端に、皮をかぶったクリが小さく顔を出していた。男の胴の下に、まんこがついている。生まれたときからそうだった体を、凱は板鎧の下にずっとしまってきた。

短い尾が、尻の下でぎゅっと縮こまった。腿を閉じたくても、噛まれた左足がそれを許さない。凱は顔を壁のほうへ背けた。ほかに

できることが無かった。背けても、灯の熱が股の肉に当たっているのは分かる。冷えた深層の空気の中で、股の肉だけが温かかった。

礫は、長いあいだ口を開かなかった。灯の芯がぱちりと爆ぜた。布を引っかけた指は、そのまま動かない。代わりに礫の鼻先が、少しずつ近づいてきた。息が、毛の薄い丘にかかった。

「鎧の下に、こんなの隠してたのか」

「……だから、金は入ってねえって言っただろうが」

礫の目は、ずらした布の脇から動かない。丸い耳が、灯の熱のほうへ少し寝た。

「あいつらは、知ってたのか」

「誰にも見せてねえ」

「……それを、あいつらは罠に置いてったのか」

「知らねえで置いてったんだよ。知ってたら、なおさら置いてくだろうが」

礫は布を戻さなかった。代わりに床の灯を拾い、凱の胸に押しつけるように差し出した。

「持て。両手でだ。踝に向けてろ」

「布を戻せ」

「戻したきゃ、灯を置いてから戻せ。そうしたら俺には金具が見えねえ。罠は開かねえぞ」

凱は灯の取っ手を両手で握った。腕を伸ばし、光を左の足首へ向ける。そこまで光を届かせるには、灯を腿のあいだまで下ろすしかなかった。右膝を立て、噛まれた左脚を前に投げ出した格好のまま、凱は自分の股を自分の手で照らした。

ずらされた下穿きの脇で、割れ目が灯の熱を受けていた。

礫は罠の前に低く屈み、荷から抜いた細い鉄の棒を、顎の継ぎ目に差しこんだ。

「もうちょい下だ」

灯を下げると、光は内腿を滑って、割れ目の縁まで降りた。毛の薄い肌に、灯の熱がじわりとこもる。温められた肉が、ゆるんでい

くのが自分でも分かった。

「揺らすな。ばねの頭が見えなくなる」

「お前が、こっちばっかり見てるからだろうが」

礫の顔は罠の真上にあった。目を上げれば、凱の股がそのまま光の真ん中にある。礫は目を上げた。棒をばねに当てたまま、しばらく見ていた。

凱の腕が震えた。光が揺れ、割れ目の縁を行ったり来たりする。揺れるたびに、皮をかぶったクリの影が伸びたり縮んだりした。灯の熱を浴びて、そのクリがゆっくり膨らんでいくのが、凱の目にも

見えた。割れ目のあわいに、灯を映して光るものがにじみ出している。まん汁だった。

「っ……くそ」

「左だ。ちょっとだけ寄せろ」

言われたとおりに灯を寄せると、光の輪の真ん中に、皮から顔を出しかけたクリが来た。罠は、光の縁にかろうじて引っかかっている。

「そこじゃ、踝は半分しか見えねえだろうが」

「半分で足りる」

棒は動いていたが、礫の目は光の真ん中から離れなかった。汗が凱の脇から腹へ流れ、肌着を濡らしていく。ずらされた布の縁が、湿って割れ目の脇に貼りついた。まん汁が尻のほうへ伝い、床の石にひとしずく落ちた。小さな音だった。礫の耳が、その音のほうへぴくりと動いた。

灯を上げれば罠は開かない。下げれば、光は自分のまんこの真ん中に落ちる。凱は両肘を腿に乗せ、震えを押さえこんだ。光の揺れが止まり、まんこの真ん中にまっすぐ落ちた。

礫の息が、内腿にかかった。棒が鉄を擦る音と、ばねのきしみと、自分の荒い息。そのあいだに、ぬち、と湿った小さな音が混じ

った。腿に力を入れた拍子に、割れ目がひとりでに開いて、閉じた音だった。

棒の先がばねから滑り、鉄を叩いた。

「……ばねが逃げた」

「俺のせいかよ」

礫は棒を差しこみ直し、手首をひねった。ばねが鈍く鳴り、顎がゆっくりと開いた。

足首が軽くなった。凱は灯を床に置こうとした。手が空けば、布を戻して、盾を拾って立ち上がれる。

だが左足に重さを乗せた途端、足首から脳天まで痛みが抜け、膝が崩れた。前へ倒れかけた体を、礫の腕が受け止めた。灯は凱の両手の中で大きく揺れたが、消えなかった。

礫は凱を抱えたまま、床に腰を下ろした。凱の背中が礫の胸に落ち、腰当ての後ろの垂れ板が礫の腹に当たって跳ね上がった。下穿き一枚の尻が、礫の両腿に挟まれて収まる。礫の長い脚が、凱の脚の外側に投げ出された。

「離せ」

「離したら、また床に座るだろ。座ってるもんは拾うぞ」

礫の左手が、凱の右膝に乗った。押し開くでもなく、閉じさせるでもなく、掌は膝頭に置かれたまま動かなかった。右手は凱の腹の上にあって、肌着越しに、その掌の熱が臍の下まで降りてくる。

「灯、消したきゃ消せ」礫の声が、垂れた耳のすぐ後ろで鳴った。「消したら、俺には何も見えねえ。手探りでやるほど、器用じゃねえんだ」

凱は手の中の灯を見た。芯の火は細く、ひと吹きで消える。消せば、さっきまでの暗さが戻ってくる。松明の色が角の向こうへ薄れていって、それきり何も来なかった暗さだった。

凱は灯を吹かなかった。取っ手を握る指に、力がこもる。

礫の右手が、肌着の裾から下へ滑った。ずれたままの下穿きの脇をくぐり、指の腹が割れ目に触れた。

「っ、ぐ……」

指は、触れたところで一度止まった。まん汁で濡れた縁を、指がゆっくりなぞり上げていく。上の端まで来ると、クリの根元に指先が当たった。凱の腰がびくりと浮き、落ちた拍子に、尻が、革のズボンの中で硬く張った礫のちんぽの上に乗った。太くて、熱かった。

「どこ触ってやがる、てめえ」

「お前が照らしてるとこだ」

指が皮の上からクリをつまみ、くにくにと揉んだ。凱の腿が閉じようとした。礫の脚が外から凱の膝を押さえて、閉じさせない。灯の光が、指の動きに合わせて揺れた。凱は自分の手で照らしたまま、その指が自分のクリをいじるのを見ていた。見るしかなかった。灯を持ち上げれば、今度は自分の顔が光の中に出る。

「ん〝ッ……う、ぁ〝……」

声が漏れた。凱は奥歯を噛んだが、鼻から抜ける息まで濁るのは止められなかった。

指が、クリの皮を根元へ押し下げた。剥き出しになった粒が、灯の熱をじかに浴びる。赤く膨れて、まん汁に濡れて光っていた。礫

はそれを、指の腹で直に転がした。

「あ〝っ、ぐ、ぅ〝……っ、や、め……」

腰が跳ねるたび、尻の下で礫のちんぽが押し返してくる。礫の息が荒くなっていた。耳の後ろにかかる息が熱く、ときどき牙がかちりと鳴る。

指はクリから離れて、割れ目の口へ降りた。指先だけを浅く沈め、入り口の縁をぐるりとなぞる。中には入らない。縁を拡げるように撫でて、溢れたまん汁をすくい、またクリへ戻る。その往復のたびに、凱の腹が波打った。

「は……っ、ぐ、お前、いつまで……」

「灯の油が切れるまでだ」

礫の唇が、肩当ての縁から出た首の付け根に押しつけられた。口を開いたまま押しあてて、熱い息を肌に吹きこんでくる。首の付け根から首筋へ、首筋から垂れた耳の根へ。礫の口が這い上がるあいだも、下の指は止まらなかった。

「生きてる奴は、罠が外れたとたん、たいてい俺から這って離れてく」

「あ〝……？」

「さっき開けたろ。お前の足は、もうどこにも噛まれてねえ」

凱の左足は、床に投げ出されたまま、もう何にも繋がれていなかった。右足もそうだった。礫の脚は膝を押さえているだけで、蹴り払えば外れる。両手は灯を握っていて、灯を放せば礫の手首を掴める。

凱は、そのどれもしなかった。

指の動きが速くなった。クリを二本の指で挟んで擦り、根元から先へしごき上げ、割れ目に溜まったまん汁をすくってはまた塗りつける。くちゅ、くちゅ、と粘った音が、狭い罠部屋の天井に返った。

「あ〝、あ〝ぁっ、クリ、ばっか……っ、いじん、な……う〝、ぁ……」

尻の下で、礫の腰が揺れていた。ズボンの中で張りつめたちんぽが、凱の尻の割れ目に沿って押しつけられ、指の動きに合わせて擦りつけられる。熱くて、太くて、尻の割れ目からはみ出すほど長かった。礫はそれを隠そうともしなかった。凱の首筋に鼻を埋めて唸るような息をつきながら、指だけは丁寧に、執拗に剥けたクリの裏側を掻き続けた。

灯の中の油が揺れて、取っ手が鳴った。

腹の奥が、絞られるように縮んでいく。腿の内側が震え、垂れた耳の先まで熱が上った。灯の取っ手が汗で滑る。光が上下に跳ね、割れ目の口がひくひくと開いては閉じるのが、跳ねる光の中に何度も見えた。

礫の左手が膝から離れ、凱の下腹を押さえた。臍の下を、外から押しつぶすように。腹の奥を外から押され、クリを前から擦られて、行き場のない熱がクリの先に集まっていく。

「い〝……っ、く、る……っ、――ぐ、う〝ぅぅッ！」

凱はイった。

背中が礫の胸に反り、巻き角が礫の肩を打った。腿が跳ね、爪先が床を蹴る。割れ目がきゅうきゅうと何もない所を噛みしめ、そのたびにまん汁がとろりと押し出されて、尻のほうへ垂れていった。指はクリから離れず、押しつけたまま細かく揺すり続けた。波が引きかけるたびに、また指で引き戻された。

「は、ぁ〝……っ、もう、はな、せ……」

灯は、まだ凱の手の中にあった。最後まで、凱はそれを放さなかった。

礫がようやく指を離した。濡れた指を灯の光にかざし、少し眺めてから、自分の口に入れた。

凱は目をそらした。そらした先に、自分の内腿があった。まだ細かく震えている。腰当ての垂れ板は跳ね上がったまま腰帯に引っかかり、ずれた下穿きの脇から、イったばかりのまんこが灯の下でひくついていた。割れ目の口から垂れたまん汁が、礫のズボンの内腿まで濡らしている。

「……戻せよ、布」

「お前の手で戻せ。もう灯は持たなくていい」

凱は灯を床に置いた。指が強ばって、取っ手からなかなか離れなかった。ようやく空いた手で下穿きの端をつまみ、元へ戻そうとする。濡れた布はよじれて割れ目に食いこみ、その布越しに、まだ膨

れたままのクリが擦れた。凱は息を呑んだ。手が止まり、布はまた横へ外れた。

礫は、それを見ていた。もう手は出さなかった。

礫は床の灯を拾って、立ち上がった。荷をほどき、中から誰かの籠手と割れた盾を出して、壁ぎわの床に置いた。代わりに凱のマントを丸め、胸当てを重ね、凱の盾を革紐で荷の外に括りつける。

「それ、置いてくのか」凱は床の籠手を顎で指した。「そっちだって売れるだろ」

「あっちは、もう死んでる」

礫は荷を担ぎ直して、胸の前に回した。灯を荷の紐に吊るし、凱の前にしゃがんで背を向ける。

「乗れ」

「乗らねえって言ったろ」

「さっきの足で、出口まで這うか」

凱は舌打ちをした。礫の肩に手を掛け、右足だけで体を持ち上げて、その背中に覆いかぶさった。礫の腕が凱の膝の裏に回る。回しただけで、引き上げはしなかった。

「おい、ちゃんと持て。落ちるだろうが」

「死体なら、荷紐で括るんだがな」

礫は膝を伸ばして立ち上がった。括る紐は、出てこない。

体がずり落ちかけた。凱は籠手の腕を礫の首に回し、太い腿で礫の腰を挟んだ。籠手が礫の胸の荷に当たって鳴った。

礫が歩き出した。長い歩幅に合わせて、凱の体が上下に揺れる。ずれたままの下穿きの脇から出たまんこが、礫の背中に押しつけられていた。礫の薄い肌着越しに、その背骨の筋がクリに当たる。一歩ごとに、その筋がクリを下から上へ擦り上げた。

「っ……ぁ〝……」

イったばかりの粒は、布一枚の擦れにも跳ねた。腿を緩めれば、体がずり落ちる。締めれば、背骨にもっと強く押しつけられる。ま

ん汁が礫の肌着に染みていくのが、自分の股の濡れ方で分かった。

通路が上りの段になった。礫は段を一つずつ踏まず、長い脚で飛ばして上がっていく。凱の体はそのたびに浮いて、落ちて、まんこが礫の背中に打ちつけられた。割れ目が背骨の筋に押し広げられ、その上でクリが潰れた。

「ふ、ぐっ……お、まえ、わざと……っ」

「段が高えんだよ」

段を上りきると、礫は歩幅を少し詰めた。揺れが細かくなった分、擦れも細かくなった。背骨の筋がクリの裏をこりこりと掻き、腰当ての跳ね上がった垂れ板が、歩くたびに凱の下腹を叩く。下穿

きはもう脇に寄ったきりで、戻す手はどちらも礫の首に回っていた。

垂れた耳の内側まで汗をかいていた。息を吐くと、それが礫の首筋にかかる。礫の首の毛が、そのたびに逆立った。凱の籠手の縁が、礫の首の皮に赤い筋をつけていた。礫は一度も、腕を緩めろとは言わなかった。

「……揺らすな」

「道に言え」

凱は腿を締めた。首に回した腕も、もう少し深く回した。

腕の下で、礫の喉がごくりと鳴った。

第2話

干し肉が胸の上に落ちてきて、凱は目を開けた。

低い岩棚の下だった。礫が荷にもたれ、残りの干し肉を牙で千切っている。凱の胸に落ちてきたのと、もとはひと切れだったらしい。

起き上がろうとすると、左の足首が軋んだ。ひと晩で長靴の中の足首が膨れあがり、脛当ての縁が腫れた肉に食いこんでいる。下穿

きは夜のうちに自分で直したものの、濡れたまま乾いた布がごわついて、股に貼りついていた。

「食ったら歩け」礫は荷の紐を締め直した。「今日は担がねえ」

「言われなくても乗るかよ」

干し肉は硬くて、塩が強かった。凱は噛みながら、荷を担ぎ上げる礫の背中を見た。マントと胸当てと盾を積んだ荷は、ずいぶん膨らんでいる。肩紐が食いこむ位置を、礫は何度かずらしてから、先に立った。首の横に、赤く擦れた筋が残っていた。

岩棚を出ると、通路はいくつにも分かれていた。礫は迷わず右へ入る。壁の傷を見た様子もなかった。

「なあ」凱は壁に手をつきながら後を追った。「道だけ教えろよ。上に着いたら、肩当てでも籠手でもくれてやる。盾は……まあ、考えてやる。なあ、聞いてんのか」

「聞いてる」

「なら」

「覚えなくていい。右か左かは、俺が言う」

「お前、それで俺を飼っとく気か」

「飼うなら、もっと軽いのを拾う」

凱は鼻を鳴らした。言い返そうとして、左足を出した拍子に足首が鳴り、言葉が引っこんだ。

通路は、すぐに下りの石段になった。

「下りかよ。出口は上だろうが」

「水が先だ。水場は一段下にある」

段は狭く、高さもまちまちで、ところどころ角が欠けている。凱は壁に籠手をつき、右足から一段ずつ降りた。左足を下ろすたびに、腫れた足首が脛当ての中で潰れる。

降りはじめてすぐ、腰当ての後ろの垂れ板が、上の段の角に引っかかった。

体が前へ持っていかれた。足首が体重を受けきれず、凱は尻から段に落ちて、そのまま下の段まで滑り落ちた。板鎧が石に当たっ

て、けたたましく鳴った。

礫が段を駆け上がってきた。

「生きてるか」

「……脛当てが鳴っただけだ」

礫は凱の腰を覗きこみ、垂れ板の留め金に指をかけた。

「これ、外す」

「腰当てまで剥がされたら、下穿き一枚だぞ」

「段で頭を割るよりましだ」

留め金が外れ、腰帯ごと腰当てが抜き取られた。尻と腿の付け根に、石段の冷えがじかに来た。礫は腰当てを荷の上に押しこみ、つ

いでのように凱の左脚の前にしゃがんだ。脛当ての革紐をほどく。腫れた足首から縁が離れると、痛みが一気に抜けて、凱は思わず息を吐いた。

「右はいいだろ。右は腫れてねえ」

「片っぽだけじゃ、歩くたびに傾く」

右の脛当ても剥がされ、荷に積まれた。礫は荷を背負い直して、また肩紐の位置をずらした。今度は少し長くかかった。

「そんなもん全部担いで上に出たら、お前、盗っ人扱いだぞ」凱は荷を顎で指した。「ギルドの門の前で、重戦士の鎧一揃い背負ってる

拾い屋がいたら、俺だって声をかける。俺を置き去りにした連中なんか、真っ先に、盗られたって騒ぎだすぞ」

「前に、それで殴られた」

「……なら、置いてけよ。俺が自分で持つ」

「持てねえだろ、その足じゃ」

礫はそれきり、荷を下ろそうとしなかった。

凱は自分の脚を見下ろした。上はまだ肌着と肩当てと籠手がある。下は、下穿きと長靴しか残っていない。太い腿が、膝の上から付け根までまる出しになっている。冒険者になってから、迷宮で脚をさらしたことなど一度もなかった。

「前を歩け」

礫が、凱の後ろへ回った。

「道知らねえぞ、俺は」

「言う。後ろからなら、お前がどこで足を取られるか見える」

凱は舌打ちをして、段の残りを降りた。下りきると、礫の灯が後ろから凱を照らした。凱の影が、前の床に長く伸びる。行く手は暗く、照らされているのは凱の背中から下ばかりだった。

「右」

右へ曲がる。通路は細く、天井が低い。凱は頭を下げ、垂れた耳を肩に寄せて進んだ。

灯の熱が、尻に当たっていた。下穿きは股を前から後ろへ通して腰で結ぶ細い布で、尻の肉はほとんど隠れない。足首をかばう歩き方のせいで、尻が左右に片方ずつ持ち上がる。そのたびに布が割れ目に食いこみ、短い尾がひょこりと跳ねた。後ろの灯は、その揺れをずっと照らしていた。

「跨げ」

床に崩れた石が転がっていた。凱は右足で跨ぎ、左足を引きずるように越えた。脚を開いた一瞬、灯が低くなった。割れ目の下をくぐった光が、前の床に細く落ちたのが見えた。

凱は立ち止まって振り返った。

「拾い屋、どこ照らして――」

「左だ」

礫の顔は灯の陰で見えなかった。灯は、もう元の高さに戻っていた。凱は歯ぎしりをして前を向き、左へ曲がった。

歩くうちに、下穿きの前が擦れはじめた。布はごわついていたが、汗を吸ううちに柔らかくなり、足を出すたびに割れ目の上を前後に滑った。滑るたびに、クリが布に押されて転がる。凱は唇を噛んで歩幅を狭めたが、そうすると尻が余計に揺れた。

「屈め。天井が下がる」

凱は腰を折った。岩の天井が頭のすぐ上に迫り、膝に手をついて、前屈みのまま進むしかなかった。尻が後ろへ突き出る。下穿きの細い布は割れ目に深く食いこみ、布の両脇から、まんこの肉がふっくらとはみ出していた。屈んだ格好だと、それが後ろからまる見えになる。凱にも分かった。灯の熱が、そのはみ出した肉にじかに当たっていたからだ。

「まだか」

「首、引っこめてろ」

後ろの足音が、さっきより近かった。灯も近い。熱が、布の食いこんだ所に集まってくる。凱は膝についた手に力をこめ、屈んだま

ま足を出した。一歩ごとに尻が揺れ、揺れるたびに布がずれ、はみ出した肉が擦れた。後ろで、礫が喉を鳴らした。

天井が上がるまで、ずいぶん長くかかった。

背を伸ばすと、割れ目に食いこんだ布が引っぱられて、前の結び目まで突っ張った。凱は籠手の指を尻に回し、食いこんだ布をつまみ出そうとした。鉄の指先では細い布がうまく掴めず、尻の肉を引っかいた。もう一度つまむと、布が少し浮いて、その下の湿った肉が灯にさらされた。凱は手を引っこめた。直すたびに、礫に見せることになる。

「止まるな。まっすぐ」

股のあたりが、じわりと温かくなっていた。布の前が湿り、湿ったぶんだけ擦れがなめらかになって、クリにぴったり吸いつく。内腿を、まん汁がひとすじ伝い落ちていった。後ろの灯が、それを照らしていないはずがなかった。

「……灯、もうちょい上げろ。前が見えねえ」

「右に寄れ。壁が出てる」

張り出した岩を避けようとして、左足が床の窪みにはまった。体が傾く。後ろから礫の手が伸びて、凱の尻を掴んで支えた。

灯を持っていないほうの手だった。大きな掌が尻の肉を下からすくい上げ、指が深く沈んだ。凱が体勢を立て直しても、手はすぐに

は離れなかった。指の腹が、下穿きの食いこんだ割れ目の脇をなぞるように、肉をゆっくり握り直す。耳の後ろで、ハイエナの荒い息が鳴っていた。

「……離せ」

尻を掴んでいた手が引いた。最後に指先が、湿った内腿をかすめていった。凱は振り返らなかった。振り返れば、礫がその指をどうしているのか、見ることになる。

「下りだ。滑るぞ」

水の音が聞こえてきたのは、そこからしばらく先だった。

通路がひらけ、天井の割れ目から水が垂れて、石の盆に溜まっていた。盆は大人が何人か浸かれるほど広く、縁は低い。底まで澄んでいて、灯を近づけると、沈んだ小石の影が揺れた。

礫は灯を、盆の脇の岩の棚に置いた。荷を下ろし、肩を回す。

「足、冷やせ」

凱は盆の縁に腰を下ろした。礫が前にしゃがみ、左の長靴に手をかける。腫れた足首が、引き抜かれる革に擦れた。

「い゛っ……てえ、ゆっくりやれ」

礫は踵を掌で包むように持ち、少しずつ揺すって抜いた。長靴が抜けると、腫れて赤黒くなった足首が出た。右の長靴も抜かれ、凱

は裸足になった両足を水に浸けた。冷たさが脛まで上ってきて、痛みが遠のいた。凱は長く息を吐いた。

「下も脱げ。洗っとく」

「お前が洗うのかよ」

「さっきから、臭うんだよ」

凱の顔が熱くなった。何の臭いかは、言われなくても分かった。

「……自分で洗う」

礫は聞かずに、凱の腰の結び目に指をかけた。ほどかれた下穿きが、尻の下から引き抜かれる。凱は籠手の両手で、とっさに股を覆った。礫は下穿きを盆の水に浸け、両手で揉み洗いした。ぬめりが

水に溶けて、白く濁ってから流れていく。礫は布を固く絞り、広げて一度振ってから、荷の口に押しこんだ。脱がされた長靴は、盆の縁に転がったままだった。

凱の下には、もう何も無かった。上は肌着と肩当てと籠手で、裸の腰から下を、鉄の掌で隠している。鉄は冷たく、掌の板の継ぎ目に、毛の薄い丘の肉が挟まって痛んだ。それでも手はどけられなかった。指の隙間から、自分の濡れた肉の色がのぞいているのが分かっていた。

礫は盆に入った。水は礫の腿の半ばまであった。凱の開いた膝の前に立ち、膝を折って腰まで水に沈む。礫の顔が、ちょうど凱の股

の高さに来た。

「手、どけろ」

「お前がどいたらな」

「洗うのは後だ。先に、俺に見せろ。……広げて」

凱は礫を睨んだが、礫は動かなかった。濡れた丸い耳だけが、凱のほうを向いている。

凱は、籠手の指を股に持っていった。

凱の口から出かかった文句は、喉で止まった。礫の目は、籠手の隙間からのぞく股の一点から、少しも動かなかった。

鉄の指先が割れ目の両脇に触れた。冷たさに、肉がきゅっと縮む。縮んだ肉を、凱は自分の指で左右に割った。籠手の関節がかちりと鳴った。割れ目が開き、灯の光の中に、内側の赤い肉が出た。クリの下で、閉じきらない穴の口が、ひくりと動いた。

「……これでいいだろ」

「もっとだ。奥まで見えねえ」

凱は奥歯を噛み、指にさらに力をこめた。鉄の指先が肉を引っぱり、割れ目がぱっくりと開いた。内側の濡れた肉が灯を映し、穴の口が丸く引き伸ばされる。冷たい籠手の縁が、クリの両脇を押さえ

つけていた。自分で開いたまんこを、凱は真上から見下ろす格好になった。水に腰まで浸かった男の顔の、すぐ前で。

礫は両手で水をすくって、開かれたまんこに掛けた。流れこんだ水が中の肉を洗い出すのを、目を細めて覗きこむ。

「ひっ……」

冷たい水が内側の肉を叩き、穴の口へ流れこんで、尻のほうへ抜けていく。礫はもう一度すくって掛けた。凱の指が震え、籠手の板がかちかちと鳴った。それでも凱は手を放さなかった。ここで放せば、自分から引いたことになる気がした。

次の水は、掛けられなかった。

礫の両手が、凱の腿の内側を掴んだ。指が肉に食いこむほど強く掴み、腿を左右に押し開く。そのまま顔を寄せ、開かれたまんこに口をつけた。

「っ、おい――」

舌が、穴の口から上へ、べったりと舐め上げた。厚くて熱い舌だった。冷えた肉の上を這う熱が、そのまま腹の奥へ入ってくる。舌はクリの手前で止まり、また下へ降りて、穴の縁をなぞった。礫の鼻先が、皮をかぶったクリに押しつけられていた。

「ふ、ぅ〝ぅ……っ、あら、うんじゃ、ねえ、のかよ……」

礫は口を離さなかった。舌を平たくして割れ目の内側を舐め、溜まったまん汁と水を一緒に啜る。じゅる、と大きな音がした。天井から垂れる水音より、ずっと近い音だった。

舌は割れ目の外にも出た。内腿の付け根の窪みを舐め、籠手に押さえられた肉のふちを唇で挟んで引っぱり、また内側へ戻る。礫の濡れた丸い耳が、凱の内腿に当たって冷たかった。凱は腿を閉じようとしたが、礫の頭を挟みこむだけで、舌は止まらない。かえって顔が押しつけられ、鼻先が皮の上からクリを潰した。

「あ、ふ……っ、ぅ゛、く……」

天井から垂れた水が、凱の肩当てに落ちて弾けた。熱くなった肌には、滴の冷たさがほとんど分からなかった。

「手、放していいぞ」

口をつけたままの声だった。喋る息が、濡れた肉に直にかかった。

凱は手を見た。籠手の指は、まだ自分のまんこを左右に開いていた。放せば肉は閉じて、礫の舌は奥まで届かなくなる。

「……指が、固まって、動かねえんだよ」

礫の鼻から、荒い息が抜けた。次の瞬間、唇がクリを皮ごと包みこんだ。

「ん〝ぐっ……！」

吸われた。皮が根元へ引っぱられ、剥き出しになったクリが、熱い口の中に吸いこまれる。舌の先がそれを下から弾き、上から押しつぶし、また吸い上げた。腰が盆の縁から浮き、礫の手がそれを腿ごと押さえつけて戻した。

「お〝……っ、ぉ〝、そ、れ……っ、吸う、な……」

礫の頬がすぼまった。きつく吸っては力を抜き、その合間に舌先でちろちろと弾いて、また吸う。そのたびに、剥き出しのクリが礫の口の中で引き伸ばされ、膨れ上がっていくのが分かった。凱の太

い腿が、礫の頭の両側で痙攣した。肩当てが鳴り、籠手が鳴り、凱の喉から濁った声が切れ切れに押し出された。

吸われるたびに、腹の底が引っぱられた。指で擦られるのとは違った。口は、中から吸い出そうとする。腹の奥の、どこにあるのかも分からないものが、クリに向かって集まってくる。

凱の指が震えた。籠手の指がまんこの縁から滑りかけ、凱は慌てて掴み直した。その拍子に、自分でさらに大きく開いてしまった。礫の舌がその開いた穴へ浅く潜りこみ、入り口の内側をぐるりと舐めて、またクリへ戻った。

「ひ、ぎ……っ、まて、まっ……なんか、へん、だ……っ」

膀胱のあたりが、張りつめていた。漏れる、と凱は思った。小便が出る。礫の顔の真ん前で、盆の水の中に。

「はなれ、ろ……っ、出る、出ちまう……っ、どけって……！」

礫はどかなかった。凱の腿を掴む指にさらに力をこめ、クリを強く吸い上げ、舌の腹で押しつぶした。

「で、る〝……っ、あ〝ぁ〝あ〝ーーっ！」

噴いた。

まんこの奥から、熱いものが勢いよく噴き出した。礫の顎に当たり、頬に当たり、はね返って盆の水面を叩く。凱の腰ががくがくと

跳ね、跳ねるたびにまた噴いた。止めようとしても止まらなかった。腹の奥が絞られるたびに、絞られた分だけ外へ出ていく。

礫は口を離さなかった。顔じゅうに浴びながら、クリを咥えたまま、噴き終わるまで吸い続けた。

最後のひと噴きが、礫の喉を伝って胸へ流れ落ちた。凱の腰が盆の縁に落ちた。

礫はそれでも顔を上げなかった。クリから口を離すと、今度は内腿に唇を当てた。噴いたものが伝った跡を、膝のほうから付け根へ、ゆっくり舐め上げていく。舌が付け根に近づくたびに、凱の腿がびくりと跳ねたが、もう何も出なかった。割れ目の口だけがひく

ひくと動いて、薄いまん汁を少しずつ吐いた。礫はそれも舐め取った。

「は、ひ……っ、ぁ〝……」

凱は自分の股を見下ろした。礫の顔から、水とは違うものが滴っている。小便の色ではなかった。澄んでいて、においもほとんど無い。初めての潮だった。凱は、自分の体からそんなものが出ることを、今まで知らなかった。

礫がようやく顔を上げ、手の甲で顎を拭った。拭いながら、目は凱の手元に向いている。

「手、まだ放さねえのか」

凱の籠手の指は、まだ割れ目の両脇にかかっていた。潮を噴いたばかりのまんこを、自分で左右に開いたまま、礫の目の前に差し出している。凱は火傷でもしたように手を引いた。開いていた肉が閉じ、閉じる拍子に残っていた潮が、ぴゅっと短く飛んだ。

礫は盆の縁に転がっていた凱の長靴を、片方拾った。口を下にして盆の水に沈め、なみなみと汲み上げる。

「何す――」

汲んだ水を、凱の股にざぶりとぶちまけた。

「ひゃあっ！？」

冷水が、噴いたばかりのクリを真上から叩いた。腫れたように膨れていた粒が、冷たさに縮み上がり、縮んだところをまた水に打たれた。凱の腰が跳ね上がり、尻が縁から滑って、そのまま盆の中へ尻餅をついた。水しぶきが礫の顔に、もう一度かかった。

「人の長靴で汲むんじゃねえ、馬鹿野郎！」

「靴は汲むのにも使える。死んだ奴のはな」

「生きてる奴のだ！」

礫の肩が揺れていた。笑っている。牙を見せて、声を出さずに、肩だけで笑っていた。凱は水の中で拳を握り、殴る先を探して、結局は水面を叩いた。

礫は長靴を逆さにして水を切り、もう片方と一緒に荷の口へ押しこんだ。それから立ち上がった。

凱の目の高さに、礫の腰が来た。濡れた革のズボンが腿に貼りつき、前が大きく張り出していた。布の上からでも形が分かった。太いちんぽが斜めに上を向き、根元の下に重そうな金玉が垂れている。ズボンの布地が、その先の形にあわせて丸く突っ張っていた。

凱の目は、そこから動かなかった。濡れた革が貼りついて、太さも、反り具合も、先の丸みまで、そのまま浮き出ている。凱の腹の奥が、さっき噴いたばかりなのに、またきゅっと縮んだ。

「……それ、どうすんだよ」

「歩いてりゃ、収まる」

礫は盆から上がり、荷の前にかがんで紐を締めはじめた。凱は水の中に座りこんだまま、礫の背中を見ていた。濡れた肌着の下で、背骨の筋が浮いている。

しばらくして、凱も水から上がった。盆の縁に腰かけると、裸の尻の下で石が冷たかった。腰から下には何も無い。長靴も、下穿きも、礫の荷の中だった。

「おい。靴、返せ。裸足で迷宮が歩けるか」

「水を吸ってる。履いたら、足が腐る」

礫は荷の前でしゃがみ、自分の肌着の裾をつまんだ。牙で端に切れ目を入れ、そこから両手で引き裂いた。布の裂ける音がした。もう一度裂く。肌着の裾が短くなり、礫の腹がのぞいた。

礫は凱の前に戻ってきて、片膝をついた。凱の左足を取り、自分の腿に乗せる。裂いた布を、腫れた足首を避けて足の甲から踵へ、ぐるぐると巻いていった。

「……お前の服だろうが、これ」

「もう擦り切れてた」

布は温かかった。礫の体温が、まだ残っていた。

右足にも巻かれた。結び目が、踝の上できゅっと締まった。

凱は足元を見下ろした。礫の濡れた丸い耳と、裂けて短くなった肌着の裾が見えた。裾の下からのぞく引き締まった腹と、その下で、まだ張ったままのズボンの前。

ほかの作品はサークルページから

---

https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker_id/RG01071549.html

奥付

作品名　冒険者、迷宮で置き去りにされハイエナの拾い屋に鎧を剥がされ、地上で次の潜りを自分から頼む

サークル　もふもふといっしょ！

発行日　2026・10・28

レーティング　R18